

ミズノ・飯塚翔太選手 世界陸上 ロンドン大会 銅メダル獲得を 母校へ報告



今夏の陸上競技・世界選手権ロンドン大会4×100^mリレーで、銅メダルを獲得した日本チームの飯塚翔太選手(26) =ミズノ=が9月11日、母校の中央大学多摩キャンパスに酒井正三郎総長・学長、大村雅彦理事長らを訪ね、昨年リオデジャネイロ五輪同種目・銀に続く、メダル獲得の報告をした。

学生記者 田村律子(法学部3年)

報告を終えた飯塚選手は学内メディアの取材に応じ、メダル獲得の背景、自らの走りに対する考えなどを明かした。

8月12日、4×100^mリレー決勝。スタンドに近い外側9レーンに入った日本のバトンは、1走・多田選手から2走・飯塚選手、そして3走・桐生選手、4走・藤光選手へ。糸を引くかのように鮮やかなアンダーハンドパスでつながれていき、表彰台へ上がった。

予選タイム38秒21 からぐんと伸びて、決勝では日本歴代4位となる38秒04の好タイムをマーク。日本中が歓喜に湧いたこの出来事は記憶に新しい。

陸上競技を始めたきっかけ

小学3年生の時、クラブチームに勧誘されて陸上競技を始めた。そこから、2016年リオ五輪銀メダル、2017年ロンドン世界陸上で銅

メダル(共にリレー種目)と、いまや世界の顔となった。

国際大会へのデビューは2010年世界ジュニア(カナダ・モンクトン)、得意とする200^mでいきなり優勝。日本人初の優勝だった。

五輪出場、世界選手権出場は各2回、アジア大会出場1回、学生スポーツの祭典・ユニバーシアード出場2回。歴戦の勇士である。

もともと走るのは得意だった。始まりは小学3年。地元・静岡での



陸上人生を笑顔で語る

陸上競技大会100回で優勝。2歳下の弟(次男)と一緒にクラブチームに入り、走ることを楽しんだ。藤枝明誠高を経て、中央大学法学部に進学、2014年に卒業した。

「きょうだいは姉と弟2人で、僕は長男です。小学生の頃、男3人は同じクラブチームに所属。7歳下の三男とは、高校・大学、学部、専門種目まで一緒ですね。彼を見ていると、とても刺激になります。中大陸上部で自分が着ていたのと同じCマークの付いたユニホームで走っている彼の姿は、自分を見ているような気持ちにさせられます」と優しい顔で語る。

後輩の中大陸上部選手の活躍にも喜んでいる。9月の第86回日本学生対校選手権(インカレ)、中大は4×100mリレー決勝で優勝、大会5連覇を果たした。飯塚選手時代から始まった学生チャンピオンの座を守ったのである。

競技中

ロンドン世界陸上では、200mと4×100mリレーに出場した。リオ五輪と同じエントリー。

競技中はどのような心境なのだろうか。

「大会で走っている最中は、小学校の運動会と心境が似ていますね。とにかく一生懸命に走ります」

走っている最中のことは何も覚えていないそうだ。

「考える間もなく終わってしまう。反射的な面もあるので、考えていたら遅くなってしまいますね。リレーも自分にプレッシャーをかけないよう、ただ全力で走っています。大会後は、自分が走った動画を見て、次はこうしていこうと改善点を見つけ、次へつなげます」

メダル獲得後の反響

リオ五輪4×100mリレー・銀メダル獲得時の反響はすさまじいものがあった。創意工夫による世界一

のバトンパスが、人々の話題の中心となった。陸上競技の人気の高まる引き金となったと言えるだろう。

翌年のロンドン世界陸上同種目は、メダルをとって当たり前という雰囲気ができ上がってしまっていた。

「期待以上の成果を上げたというよりは、期待通りの成果を上げたということですね。2年連続大きな国際大会でメダルを取れたということは昨今、競技場取り壊しなどの話題が出る中、良い兆しになったのではないかと思います」

2走が ベストパフォーマンス

リオ五輪、ロンドン世界陸上。共に4×100mリレーにおいて2走を任された。自身がベストパフォーマンスできるポジションであったのだろうか。

「最初は4走が自分に一番合っていると思っていたのですが、2走もすごく良い区間ですね。2走の役割としてはバトンが2回ある。2走は各国に速い選手がいるので順位を上げるというよりも、そのままキープして、バトンを落とさないよう次の選手に託すことが重要になってきます。あくまで、つなぐ区間ではあるのですが、そこに魅力があります」

「2走は気持ち的にすごく楽です。1走のスタートから2走まで10秒くらい。1走スタートと一緒にスタートする気持ちで準備できます」

メンバーは知っている、 自らの役割

「走る順番については、最終的に

コーチから言われてそれに従う形です。ですが、選手達も『自分はこの区間が合っている』とみんな思っていることはだいたい同じですね。もちろん、話し合います。1走から2走へのバトン渡しも何人かと何度も行っていますね。最近、若いメンバーもバトンパスの話に積極的に入るようになってきて、バトンミスは確実に減りました。意思疎通ができるようになったため、修正もしやすくなりました」

良い雰囲気の中でメンバー構成ができていくという。やや照れた表情から、日本スプリント界のさらなる躍進が期待できる。

個人目標

100㈬は日本歴代9位の10秒08。200㈬は同歴代2位の20秒11の記録を持つ。

「僕、100㈬が好きなんです。200㈬も結果的に良い記録が出れば、それはうれしいことです。200㈬での日本記録樹立も魅力的です。そのためには100㈬でもトップを取れるぐらいの力が必要になってき

ます。100㈬にもずっとチャレンジしていきたいと思います」

陸上の魅力

華々しい栄光を得てきた側面でも、厳しい苦難も乗り越えてきた。第一線で戦い続けるトップ選手にとって、陸上競技の魅力とは。

「陸上はやはり個人競技なので、良い時も悪い時も自分自身に返ってくるのが魅力的ですね。自分が優勝したら、自分だけにスポットライトが当たる。その時は、本当に最高の気持ちなんです。失敗したら、すべて自分の責任になる」

「リレーに関しては、気持ちも変わります。運動会の最終種目のような感じで楽しいですね」

すがすがしい笑顔の中に、陸上への熱い思いが感じられた。

飛躍し続ける日本スプリント界。厚みを増した選手層のリーダーともいえる飯塚選手に、憧れる者は今後も後を絶たないであろう。



「Shota Iizuka」と刻印された銅メダル

本誌記事を英文にして、世界へ発信中

Hakumon Chuo・英語記事のページには、下記の手順で進んでください

- ① 中大公式ページ（日本語）を開く
<http://www.chuo-u.ac.jp/>
- ② 右側にある ChuoOnline のバナーをクリック
- ③ ChuoOnline のページへ
<http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/research/20151112.html>
- ④ 右上 English をクリック
- ⑤ ChuoOnline の英語サイトへ
<http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/dy/>
- ⑥ 右の目次から HakumonChuo をクリック
- ⑦ Hakumon Chuo 英語ページへ
<http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/dy/hakumon/>

HakumonChuo 英語記事掲載ページの見かた

- ① 中大公式ページから ChuoOnline をクリック



- ② ChuoOnline のページから English をクリック



- ③ ChuoOnline 英語ページから HakumonChuo をクリック



- ④ HakumonChuo 英語の記事はこちらからご覧いただけます。ブックマークに追加していただくと、次回から楽に開けます。





取材を終えて

オリンピックメダリストにお会いした

私は中大陸上競技同好会に所属している。憧れの飯塚選手に取材できるとあって、前日から胸の高まりを抑えきれずにいた。

開始時刻が近づくにつれ、世界トップレベルで活躍されている選手にお会いできるという実感からなのか、緊張のあまり萎縮し、顔がこわばってしまっている自分がいた。

そんな矢先、ついに現れた。紺のスーツを身にまとった笑顔のメダリストが、目の前に現れた。取材陣と顔を合わせると、長身を折り曲げて丁寧にあいさつする。その姿に誰もが好感を抱いた。

プレッシャーをパワーに

取材は、桐生選手が打ち立てた日本人初の100m 9秒台・9秒98の話からスタートした。10秒の壁を破る歴史的出来事にも特段驚くことはなかったという。

「彼力から考えて、ふさわしい結果だと思います。すごく良い刺激になりました」と落ち着いた口調で語る。世界で共に戦ってきた仲間を心の底からたたえる思いが見てとれた。

印象的な言葉があった。「プレッシャーは感じません」。言葉の裏には「自分自身でプレッシャーを感じさせない」といった精神的な強さがあると感じた。

ロンドン世界陸上では、リオ五輪銀メダルの実績から、メダル獲



緊張してインタビューする学生記者(左)と飯塚氏

得という日本人の期待を一心に背負っていたように思われた。飯塚選手は、この「期待」をプレッシャーではなく「パワー」に変えているのだと感じた。

「イベントなどで多くの方にお会いすることで元気をもらい、今シーズン頑張ることができました」。そう話す飯塚選手からは自然と笑みがこぼれていた。

一緒に戦う仲間や応援してくれる人々、自分を支えてくれる全ての人たちへ、常に感謝の気持ちを忘れない姿勢に強く胸を打たれた。人柄の良さがひしひしと伝わってきた。

学生である私に対しても、終始敬語でありながらも、気さくにお話してくださった。だからなのか、私の顔も次第にほころんでいったという。

メダルに託す夢

銅メダルを見せていただいた。

選手達の思いが詰まった重みのある、光輝くメダルの裏には「Shota Iizuka」と名前が刻まれていた。

予選で走った選手を含みリレーメンバー5人、一人ひとりにメダルが授与され、一つ一つに選手の名前が印されるのだという。この粋な計らいは、ロンドン世界陸上のリレーのみだそうだ。

2020年の東京オリンピック。「Shota Iizuka」と刻まれた文字をまた見たいと願ったのは、私だけではないだろう。(田村律子)



メダルを手にして笑みがこぼれる